明るい光に 心地好い風が吹く。
「もう、春かなあ。」と 思わせる。

本当は、僕は、大きくなったら
何をしたいのだろう。

本当は、絵を書いたり、芸術家になりたいが、
それは、かなわぬ、贅沢な夢。

そう、思いながら、来た電車に乗った。

考えこんでいるうちに、引きづられる様に電車は地下にもぐった。
自分の将来の不安も重なり、息苦しい思いだった。

終点の四条河原町で降りて、地上に出て時、ほっとした。

四条大橋にさしかかった時、三条京阪から、
特急がゆっくりと出発するのが見えた。
僕は、四条大橋を急いで走り、特急に飛び乗った。
次の停車駅、七条京阪で降りて、途中、本町のおばとこへ寄った。

「こんにちは、お邪魔しますー。」と言って
のれんを くぐって 入ると、修ちゃん、けいちゃんと、
おばの三人が、暇そうに、コタツに入り、テレビを見ていた。
おばが、いつもの調子で、「何か ゆうたろか、
昼食べてへんやろ、腹すかしているやろ。」と、言ってくれた。
僕は、お金が持っていないので、何も食べていなかった。
おばは、図星だった。

49 僕の気持ちは複雑だった・・・・・・・・・・・・・212